

堀辰雄参考文献目録 補註 (重箱の隅もきれいな方が好い)

大森 郁之助

まえがき

「……文献目録・補註」と題したが、これは、本稿筆者が以前に堀の参考文献リストを作成公刊していて・そのアフターケア、という意味ではない。先年、某近代文学研究事典の堀の項を担当した際、研究略史や主要文献一覧をまとめるのに、当然ながらすべての先人の業績を現物にあたるわけには行かない(ということは、かの谷沢永一氏さえも公言している)ので既刊諸家の文献目録を出発点にさせて頂いた。ところが、比率からいえばごく僅かではあるが、同一文献についてのデータや扱いが各目録間で異なっている為そのまま孫引きはし兼ねる、といったケースが、もう一度繰り返せば極めて僅かだが、有るにはあった。そこで、それらの確認結果の中でとくに紛らわしい、或いは、此事と謂えないと思われる幾つかを摘記しておき、自他の後日の便に供そうというのが趣意である(従って、以下、就中第I節については稿者の見落しの指摘を、図々しいようだがこれ又自他の為に、期待している。——頃日、

「四季派学会会報」(96・10・15付)にも同趣旨を一言述べておいたのだが、未だ吉報が得られないので。

I 最初の文献目録

これが最初のもの、という言い方は常にかかなりの冒険(見落したものは無い、と言い切るわけだから)だが、媒体が同人雑誌や研究サークルの会報などでなく一往全国規模で市販されたもの、という条件を付すならば、恐らく、

(A)「堀辰雄研究文献目録」(無署名。『文芸』「特集 堀辰雄追悼号」、昭28・8)

(B)小久保実編「堀辰雄研究文献目録」(新潮社版七巻本『堀辰雄全集』月報五号、七号各「附録」。昭30・3、32・5)の、いずれかを挙げることになろうかと思われる(ちなみに、文献目録作成の草分けである右小久保氏の最初の単行研究書『堀辰雄』(現代文学研究会、昭26・11)には文献目録は付いていない)。そのいずれに就くかは、へともかく「……文献目録」と題し^(註)「最も早く」公刊されたもの、という、いわば形式的要件に機械的に拠るか、それとも内容の吟味も経るかで、分かれよう。

(A)は時間的には明らかに(B)に一年半先行するものの、掲出文献数では単行書(「」所収)を含む)が(B)の八十二点に対して二十七点、雑誌・新聞・月報等掲載稿が(B)の百九十七点に対して二十三点と比較にならず、(B)を基準にして評すれば単なる数量差ではなくてアト・ランダムな抄記の感さえある。もともと、原則論的にはこうした網羅度は当然後年の物ほど勝るわけだから、(A)と(B)との間の一年半に調査の進展が格別に急だったと仮定しても、(A)は単行書については書名・著者名のみを記し刊行年月・発行所名はすべて省いている。これは文献目録としては見過ごせない欠落であろう。

単行書の部で、一点だけではあるが(B)に漏れ(A)で挙げている文献が見出される、といった功績も無視はできないが、やはり(A)を似て本格的文献目録の最初と做すのは問題があり、いわば目録〈前史〉として銘記するに留めるのが妥当ではなからうか。

もつとも、(B)も、月報掲載という性質上、一般論としては紙数の制約⇨網羅の自制が予想されるところだが、本目録は編者の基本方針として

従来の文献目録では黙殺されていた文芸時評的なものでも、堀辰雄の人及び作品に触れている文章は、できる限り集めることにした。その他、文学傾向・書評のような文章もおさめて、できるだけ完全なものにするよう心掛けた。

(分載第一回(単行書の部)の「はしがき」)

と網羅性が力説されていて、前記、(A)との掲出文献数の比較に徴しても、掲載媒体ゆえの懸念は殆ど不要と思われる。なお、(B)の分載の間、第二回(雑誌・月報・新聞の三部構成)掲載の直前に、『文芸』臨時増刊「堀辰雄読本」(昭和32・2)に

(C)小久保実編「堀辰雄重要文献目録」

が付載されているが、〈重要〉というタイトル通り、掲出は単行書(同前)三十四点、雑誌(特集号及び掲載稿)五十二点と、同一編者の(B)よりもむしろ(A)に近い規模に縮約されている。そして時間的にも、(B)の完結よりは早い、ということよりも、やはり、(B)の掲載開始より遅い、ということの方に拠って、先後は決せられるべきだろうと考える。

掲載でなく成稿の先後を考えても、(B)は第一回の「はしがき」に「昭和二十九年十月十五日現在において作成した」とあり、第二回は末尾に「昭和三十年二月頃の作製」、但し、小久保氏作製のものに「編輯部の調査によるものを

若干加へ」と付記するが、掲出文献の刊行下限は三十年一月。それに対して(C)は下限三十一年十一月で、前者の先行は明白である。

以上、現段階では(B)を以て文献目録〈史〉の起点と做したい。

註

当該文の表題に係らず「内容上……に類する物」をも含めるのが、観念的には望ましいと思うが、そうなると作家論の(場合によっては作品論の)末尾に参考書目が付記されているのなども含めない理由は立て難く、所謂きりのない作業(その結果として第三者にとっては信頼度が不確かな物)になることの方を、避けた。そのため、例えば、時期的には(A)と並ぶ角川版『昭和文学全集』月報や筑摩版『現代日本文学全集』元版月報掲載の各「研究書目・参考文献」(角川版は昭28・7、掲出五十七点、筑摩版29・12?六十五点)なども機械的に対象外とした。

II 目録掲出の単行書について

佐藤泰正著『近代日本文学とキリスト教・試論』(発行所 基督教学徒兄弟団、発売元 創文社。昭38・9刊)

大抵の書籍は発行所・発売元が同一だから本書もそれに合わせた表示し方をしようとした結果であろうが、「創文社」のみ記して「……兄弟団」の方は抹殺している表示し方が、一般(時に、その逆、及び併記)である。

たしかに図書館で検索するには発行所名は要らないし(もつとも、発売元の名も)、小売店に注文するには発行所より発売元が判っている方が便利だが、書物を一の流通物資として(だけ)でなく文化資料として把える(開き直った言い方をすれば)場合に、より基本的なデータは、制作者(発行所)か、流通業者(発売元)か。本書の奥付には明確に「発行所……」「発売元……」と別行列記してあるのだから、安易に便宜上省略するのは、便宜と称するのがおこがましい無思慮に属しはしまいか(因みに本稿筆者は前述担当項目では発行所名の方を記した)。

本書は収録稿の論述対象からいえば芥川・堀・中原中也を二本の柱とする論文集だが、内、堀関係は篇数で全十三篇中の四篇、頁数では全体の四十五%を占め、へ一部に堀論を含む。単行書としては分量的にも最右翼に近く位置するといえる物。従って、殆どの目録に掲出するのはその点からも当然ながら、なぜか、発行年月を、相似していない。見誤りの起こり難い数字に誤っているものが目についた。

戸谷天一著『堀辰雄抄』（著者本名、本橋保純。私家版（中央公論事業出版）。昭41・1刊）

書名が少々紛らわしいが、堀辰雄に関係があるのは収録全六篇中で冒頭に置かれた同題名の小説風評伝（実名小説？）一篇のみ。他の五篇は、登場人物も背景も特に堀や堀の作品に繋がるとは思えない創作小説である。

その標題篇自体は、立原道造の批判的な堀論「風立ちぬ」に対する堀の側の対応（反応）について、本稿筆者には未見の（ということとは、自惚れがましいが恐らく世間周知ではあるまい）資料に基づくのか、それとも著者の想像力か、いずれにしる注目に値する踏み込んだ叙述を含み、かいなでのモデル小説や評伝とは一線を画するものと思うが、同時に、通念上の〈研究〉に入るものかどうか、かなり〈作品〉に近づいてはいないか、一考を要する。

評価とは別の事柄として、いわゆる研究資料・参考文献としての扱い方（分類）には、本篇そのものも、また、分量的に全体の約四分の三が堀とは無関係な小説（集）であるこの書物も、工夫が（機械的な型式論で頭から除外してしまうには惜しいから）望ましい（こまかい事をいえば「研究」文献目録か「参考」かでも、違って来よう）。

小川和佑著『堀辰雄』（三交社。昭48・8刊）

本書もまた標題の作家以外の四人の詩人に関する論考を併収していて、分量比では堀論は全体の約二割にとどまる。書名は紛らわしいが、〈一部に〉堀論〈を含む〉ところの単行書（または、単行書〈に所収の〉堀論）の項に収められるべきものである。

なお、これに類する書名の付け方は他にも散見するので注意を要する。

Ⅲ 雑誌特集号について

『詩学』 昭和二十八年七月号

二十八年五月の堀の死の後、幾つかの雑誌が或いは追悼号と銘打ち或いは追悼特集を組んだが、本誌・号は本文頁中に「堀辰雄追悼」と題した三段組み一頁の無署名記事（略伝と、習作期の詩二章の紹介）があるものの、本号全体として〈追悼（号）〉とは、表紙にも目次にも、うたつてはいない。〈雑誌特集号〉の項に挙げられていることがあるのはミステリーに属する。

Ⅳ 雑誌等掲載稿について

大岡昇平「新帰朝者——わが師わが友・2——」（『新潮』昭28・9）

連載稿の今回は、冒頭に、口を極めたといえそうな、堀の人と作品双方への「悪口」が述べられている。論旨としては堀批判の通例といえる範囲を出ず格別の事はないにしろ、「信州で手のひらほどの肺で生きてる人間の悪口をいう奴はな」く「往生したらみんなで賞めた」この当時の発言として、意見の当否とは別に稀少価値は十分あり、

そういう時期にそういう発言が出たことの意味は興味深い（筆者大岡自身について考える材料としても）が、しかしその部分は全五頁中の一頁弱である（その後は新婦朝の今日出海・小林秀雄訪問記）。堀の参考文献として挙げるにはかなり思い切りが要る。

三島由紀夫「現代小説は古典たりうるか」（『新潮』昭32・6、7、8）

題名の表記を単行本初収時に「……得るか」と改めた（新潮社刊『現代小説は古典たり得るか』、昭32・9）ために、堀関係の文献目録のみならず三島本人の作品リストや年譜でも表記の混乱が見られるが、雑誌掲載稿として掲出するなら当然「……うるか」である。

なお、三回連載の（一）（二）が堀の「菜穂子」を、最終回は石原慎太郎「亀裂」を主対象とするが、その最終回に於ても約十箇所で前二回に論じた「菜穂子」を引き合いに出し、結末は二作品の対比でしめくくっている。従って、堀の参考文献としても（一）（二）だけに限定せず、最終回（副題「石原慎太郎氏の『亀裂』について」）をも含めた本篇全体を挙げて、迂闊の所為とは断じ難い。

佐藤泰正「堀辰雄——その一側面——近代日本文学とキリスト教に関する一試論——」（『国文学研究』二十七集、昭38・3）

必ずといっていい程掲出されているのに、掲載誌の発行年月を誤記している例が一ならずあったので、念の為、記しておく。

(付記 I 節の記述については平成七年夏、小久保氏に校閲を願ったが、とくに教示は頂けなかった。少なくとも小久保目録に関しては、ひどい見当違いは無かったということか、と都合よく解釈している。

平 9・12・26)